

緩和ケア実習における看護学生の学び ー実習レポートのテキストマイニングによる分析ー

山陽学園大学看護学部看護学科

4年 末國愛菜

指導教員 林由佳

研究動機

がんと診断された人々
10年生存率55.5%と
上昇
2018.2国立がんセンター

緩和ケアとは、がんが
進行した時期だけでなく、
がんと診断された時
から治療中も必要に応
じて行われるべきもの

緩和ケアを長く必要と
している人が多く、緩和
ケアでの看護の役割の
重要性がますます高
まってくる。

ターミナル期だけでなく、
がん治療を行っている
人々の緩和ケアを学ぶ
必要がある。

研究目的

看護学生の緩和ケア病棟と外来化学療法室実習でどのような学びがあったのかを明らかにし、緩和ケア実習での学習のあり方について考える。

研究方法

1. 研究対象

- 成人看護学実習Ⅲ(緩和ケア)の実習を行った看護学科4年生のうち同意が得られた16名。年齢と性別に制限はない。

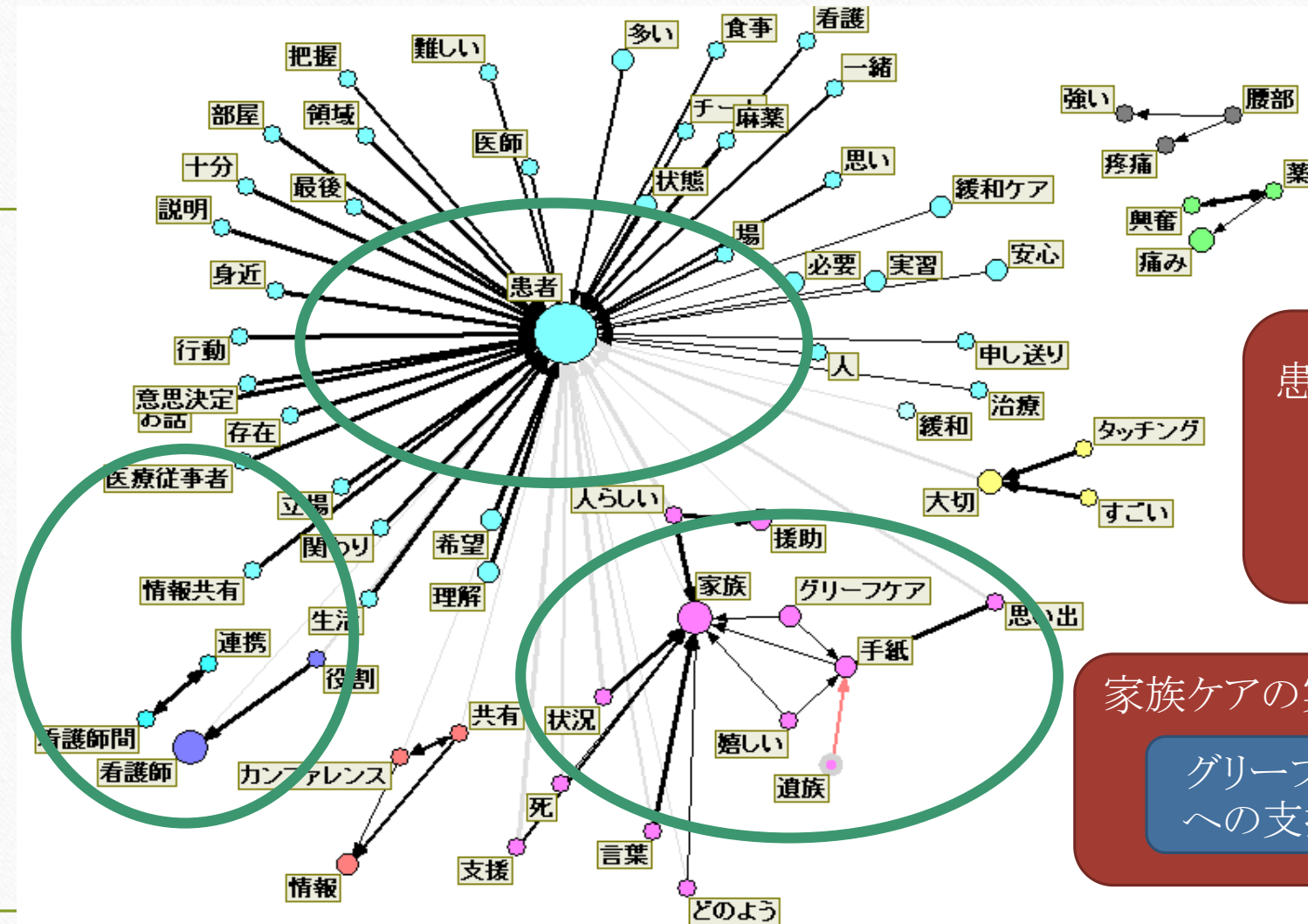
2. 調査方法

- 成人看護学実習Ⅲ(緩和ケア)の実習終了時に学びをまとめたレポートデータをテキストマイニングツールText Mining Studio 6.1.1(株式会社NTTデータ数理システム)を用いて、学生が緩和ケア実習でどのような学びがあったのかを抽出し、明らかにする。

3. 倫理的配慮

- 山陽学園大学倫理審査委員会の承認を得て行われた(平30大006)。

緩和ケア病棟での学び



疼痛緩和

患者を中心とした看護

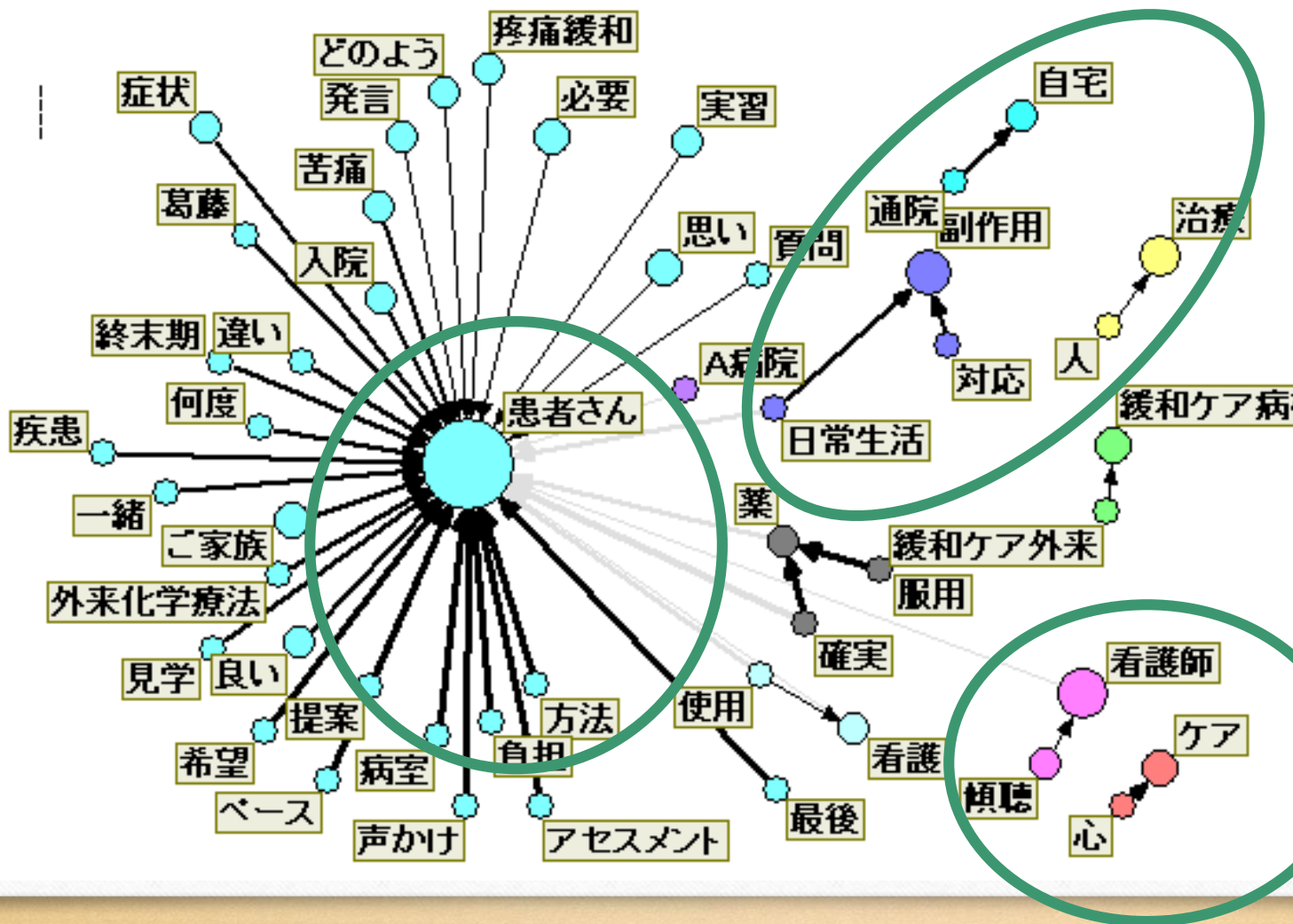
「タッチング」を始めとした細かい関わり方

家族ケアの実際

グリーフケアとして遺族への支援の実際を学ぶ

他職種連携

緩和ケア病棟と外来化学療法室での学び



家族ケア

がんサバイバーとして患者を見る視点

患者を中心とした看護

考察1

- 患者を中心とした看護

緩和ケア病棟実習のみと外来化学療法室の実習の両方で患者への関わり方についての学びがあった。その中でも特に緩和ケア病棟のみの実習では、「タッチング」を始めとした細かい関わり方まで学んでいた。看護師とともに患者の傍へ行き、患者に対する看護師の関わり方を実際にみる機会が多くあったため患者への関わり方について広く学ぶことができたと考える。

- 家族ケアの実際

家族ケアについては緩和ケア病棟実習のみと外来化学療法室の実習の両方で学んでいたが、特に緩和ケア病棟のみの実習ではグリーフケアとして家族に送った手紙を読ませていただき、意識的に家族の思いや遺された家族への支援の実際を学ぶことができた。

考察2

- 他職種との連携

緩和ケア病棟のみの実習では、他職種との連携が学べていた。緩和ケア病棟では、他職種を含めたカンファレンスを行うため連携の実際を学ぶことができるが、外来看護では、他職種と関わる機会が少ないため他職種連携が学びにくかったと考えられる。

- がんサバイバーとして患者をみる視点

外来化学療法室の実習では、患者を生活者として捉えた学びがあった。自宅通院をしながら化学療法を受けているので、患者が安心して日常生活を送れるように副作用の対応や日常生活の支援など看護師が行う看護の実際を学ぶことができたと思う。

結論

1. 患者を中心とした看護は、緩和ケア病棟実習のみと外来化学療法室の実習の両方で学び取ることができていた。特に苦痛の緩和や傾聴といった関わり方を含めた看護が学んでいた。
2. 家族ケアについては、緩和ケア病棟実習のみと外来化学療法室の実習の両方で学んでいたが、特に緩和ケア病棟のみの実習ではグリーフケアなど広く学んでいた。
3. 他職種との連携については、緩和ケア病棟のみの実習のなかで特に強く表れていた。
4. 外来化学療法室での実習では、副作用の対応や日常生活の支援など患者を生活者として捉えた看護が学んでいた。
5. 緩和ケア病棟実習では外来化学療法室での学び、外来化学療法室での実習では緩和ケアの学びの内容が十分ではなかったため、互いの学びを共有しこれからの緩和ケアについての学習を広げる必要がある。

研究の限界

- 本研究は1大学の16名の看護学生の緩和ケア実習での学びを分析したため、全ての看護教育機関の学生にその相違が当てはまるとは言えない。